

【フォント：MS明朝 1行30字で設定】

わがはい  
我輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。我輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生しよせいという人間中で一番獰悪どうあくな種族であったそうだ。この書生しよせいというのは時々我々を捕えて煮にて食うという話である。しかしその当時は何という考えもなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼のでのひらに載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。てのひらの上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始めであろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。